

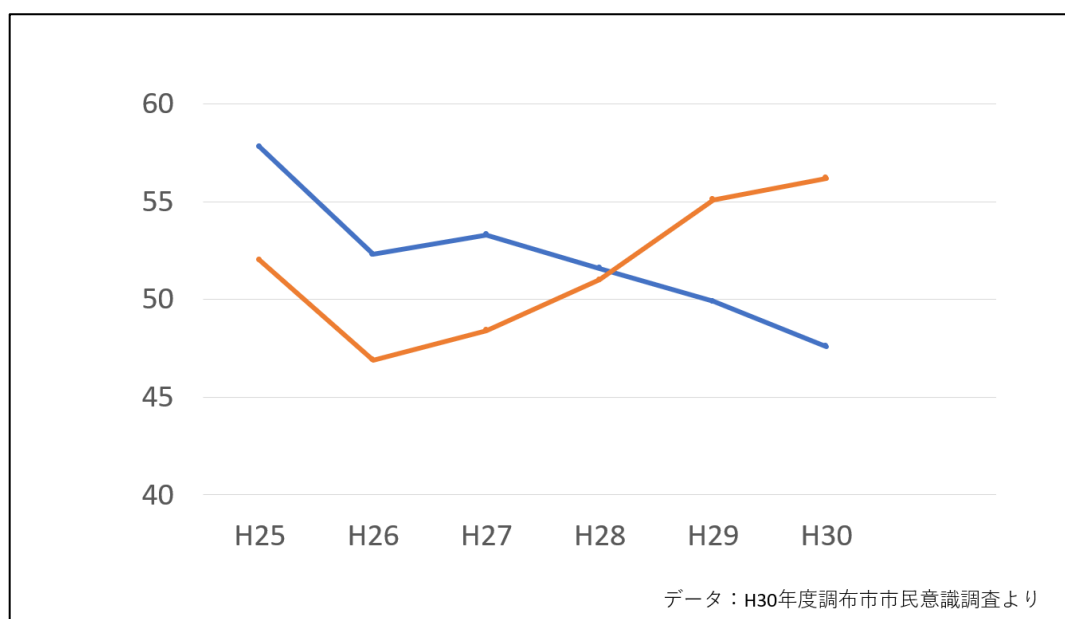
## グリーンホールの更新に当たって、 すべての市民に文化的体験を保障する居場所的な空間を

### (1) 誰もが文化を楽しめる施設にするために

#### ア. 現グリーンホールの利用状況の把握と課題認識は

3つ目の質問に移ります。現在、総合福祉センター南側の道路拡幅計画や、建物の老朽化、また道路認定された駅前広場とグリーンホールの階段の整合性などの問題の解消を視野に入れて、グリーンホールの更新に向けて市内での検討が始まっているところです。駅前広場という調布の顔に大きな予算をかけて建設されるものですので、誰もが気軽に足を運び、文化を楽しめるものにしなければなりません。

市民意識調査によりますと、芸術文化を鑑賞した、自ら芸術文化活動を行った、また鑑賞も活動もした市民の割合は H26 年以降増加しており、市民の芸術文化への関心が高まっていることがうかがえます。



オレンジの線が芸術文化に直接かかわった市民の割合を示していて増加傾向にあります。一方、青い線は、そのうち、市内の公共施設、つまりたづくり、グリーンホール、せんがわ劇場を利用した市民の割合を表しており、こちらは年々減少しています。目標値の60%に対し、H29年度に50%を切り、H30年度は47.6%と、さらに2.3%減少しています。これは、民間の映画館ができたことによる影響も考えられますが、芸術文化に関心がある市民が必ずしも市内の公共ホールを利用しているわけではな

い現状がうかがい知れます。

そこで、まず現在のグリーンホールの利用状況について伺います。年間にグリーンホールを利用する市民は全体の何割くらいでしょうか。中には年に一度しか利用しない市民も多くいることが想像されますが、一人あたりの平均利用回数など、現在のグリーンホールの利用状況についてどこまで把握しているか、またどのような課題があると認識しているでしょうか。

## イ. 市民が新施設に求める文化的体験とは

続けて、市民が新しい施設に求める文化的体験についての見解をおたずねします。私たちに保障されるべき人間らしい生活は、憲法 25 条では「健康で文化的な最低限度の生活」と説明されています。この条文は福祉的支援の根拠として引用される条文ですが、私は、文化的体験に多く触れることが全体として市民の「健康で文化的な最低限度の生活」の保障を底上げすることになるのではないかと考えます。特に格差が広がる現在の社会において、すべての市民に最低限度の生活を保障する視点からも、グリーンホールの更新においては、だれでも文化的体験を楽しめる施設を目標にしておくことは非常に大切なことだと思います。

市の基本計画には施策 19「芸術・文化の振興」の方向性として「市民が芸術・文化を日常的に身近なものとして楽しみ、また、自らいきいきと芸術・文化活動を行えるような環境を整備することにより、文化の香り高い、市民文化をはぐくむまちづくりを進め」とあります。この方向性の中、ではどれくらいの市民がグリーンホールを利用をしているかということ、市民の4分の1～3分の1程度にとどまっているのですから、舞台芸術に直接触れるイベントを提供するだけでは、すべての市民に文化的体験を提供するには限界があると言えます。来年調布でも東京 2020 大会が行われますが、経済効果だけをねらったイベント型の取り組みだけでは文化の祭典でもある東京 2020 大会のレガシーは望めないと、コミュニティデザインの専門家も警鐘を鳴らしています。

例えば、お金を払って劇場に入らなくても、まずは建物に足を踏み入れることで感じたり触れたりできることがあります。それもまた文化的体験ではないでしょうか。建物をホール機能だけで完結させず、これまで公共ホールに関心がなかった市民が、ホールそのものには用事がなくても施設内に居場所を見つけられるような工夫をすることで、より多くの市民が文化的体験を享受できると考えます。

また、居場所的な空間があれば、色々な目的をもった市民がホールを訪れます。そこで思い思いの活動をする中で、新しい交流が生まれ、新しい市民文化が生まれる可

能性もあるでしょう。広く市民が求めている文化的な体験とは、必ずしも高尚な舞台芸術に触れることだけではなく、日々の生活にちょっとした文化的なエッセンスを得られるような、自分たちでも作り上げられる市民文化に触れる機会、というレベルのものも含まれると考えます。

そこで質問します。市内の公共施設の利用状況が低下しつつある現状を踏まえ、グリーンホールの更新にあたり、誰もが文化を楽しめる施設にするために、まず市は、調布市民がどのような文化的体験を求めていると認識しているのでしょうか。何か調査を行っているのでしょうか。また、文化的体験をより多くの市民に提供するには、新しい施設はどのような施設を目指すべきか、市の見解をお答えください。

### <生活文化スポーツ部答弁>

だれもが文化を楽しめる施設にするためにとの御質問にお答えします。

まず、現在のグリーンホールの利用状況の把握と課題認識についてです。

㊦平成30年度における大ホールと小ホールをあわせた総利用者数は16万1297人、総利用件数は1595件でした。そのうち、約86パーセントが市内の団体及び個人による利用であることから、グリーンホールは、市民にとって様々な文化活動や芸術鑑賞の場となっているものと受け止めております。

なお、平成29年度に文化・コミュニティ振興財団が無作為抽出により実施した市民意識・ニーズ調査では、最近1年間にグリーンホールを利用したことがある市民の割合は、約31パーセントでした。また、平成30年度市民意識調査では、1年間に、文化会館たづくり、グリーンホール及びせんがわ劇場を利用した市民の割合は、本調査で回答いただいた16歳以上の市民の約27パーセントとなっており、様々な文化活動や芸術鑑賞の場として市の文化施設が利用されているものと認識しています。

市ではこうした利用状況等を踏まえつつ、市民の芸術文化への関心を更に高めるための魅力ある事業の展開や、年齢や障害の有無に関わらず誰もが芸術文化に触れ、親しみ、参加できる機会の創出など、より多くの市民に利用いただけるホール施設を目指して取り組んでいく必要があると考えております。

①そのため、現在、市では、グリーンホールの建て替えに向けて、施設利用団体や有識者からの意見聴取等を行いつつ、施設やホールとしての機能面での課題等を整理しながら、施設の今後の方向性や主な機能、規模など、整備に関する市の考え方について、庁内横断的に検討を進めているところです。

その中で、施設機能の検討に当たっては、芸術文化の拠点として、広く市民から愛される、市民のための芸術文化活動を育むホールの継承を基本的な考え方としつつ、誰もが気軽に舞台芸術に触れることができ、感動を味わえる芸術文化の体験の場としての視点に加え、市民の芸術文化活動を育む芸術文化の創造の場としての視点が必要となります。さらに、芸術文化活動を通して新たな魅力や賑わいを創出し、市民が集い・交流する場となるなど、多面的な効果をもたらす視点についても重要であると考えております。

現在、こうした考え方について、施設利用団体と意見交換を行っているところであります。今後は、グリーンホールの歩みを振り返りつつ、新たなホールに求められる役割や機能など、グリーンホールの今後の方向性に関する、市民意識・ニーズ調査などのアンケートの実施を含め、広く市民から御意見をいただきながら、検討を進めて参ります。

ご答弁ありがとうございました。最後にまとめますので、このまま続けます。

## **(2) 市民の活動を通して新施設と駅周辺に一体感の創出を**

調布駅前南口広場の本来の魅力は、公民館や図書館、GHなどの教育施設や文化施設に囲まれた空間の中で幅広い市民の活動が繰り広げられてきていることで、駅前広場整備事業が進められるこれまでの流れの中でも、イベントができ、憩える広場機能を駅前に求める市民の声が多いことが再確認されています。新しい施設をホール機能だけに限定せず、市民の居場所となる空間を提供することで、駅前広場との連続性の中でまたにぎわいが生まれるのではないかと考えます。そこで、市の駅周辺のまちづくりについてのビジョンと、また、その中で新しい施設がどのような施設として配置されるのか、駅周辺と新施設の間に一体感を生み出すことについての見解をお答えください。

### **<行政経営部答弁>**

新施設と駅周辺に一体感を、との御質問にお答えします。

①②今年度スタートさせた後期基本計画では、調布駅周辺のまちづくりのビジョンについて、京王線の地下化と連動して、ソフト面とも相まった南北一体のまちづくりを前進させていくため、駅前広場や鉄道敷地の整備など、利便性と快適性を兼ね備えた魅力あるまちづくりを推進していくことを重点プロジェクトの一つに位置付け、組織横断的に取り組んでいます。

その中で、調布駅前広場については、交通結節機能の向上はもとより、市民の皆様が集い、親しまれる場となるよう、市民参加手続を実践しながら、検討を重ねているところです。

また、グリーンホールについては、屋外階段が駅前広場整備に係る都市計画区域内にあることなどから、駅前広場の整備との整合を図りつつ、今後10年以内を目途とする建替えを見据えた取組を進めていくこととしております。そのため、有識者や施設を定期的に利用されている団体等からの意見聴取を行いながら、施設機能や規模、公民連携手法、スケジュール想定など、グリーンホールの整備に関する市の考え方の整理に取り組んでいるところです。

③施設機能の検討に当たっては、広く市民から愛される市民のための芸術文化活動を育むホールの継承を基本的な考え方としつつ、芸術文化の体験・創造や市民が集い・交流する視点に加えて、駅前広場と調和し、まちの価値を高める視点などを踏まえて取り組む必要があると認識しております。併せて、他自治体や民間施設におけるホール整備に当たっての周辺環境との調和や連携した運用などの先行事例も参考にしながら今後の検討に取り組んで参ります。

#### <生活文化スポーツ部答弁>

市民の芸術文化活動の場としてのグリーンホールと駅前広場との一体感について、お答えします。

④市では、これまでもグリーンホールにおける事業展開の中で、駅前広場を活用した取組を進めて参りました。

その一例として、調布国際音楽祭では、調布駅からグリーンホールへ向かう動線上にある駅前広場において市民音楽家によるウエルカムコンサートを実施しているほか、調布よさこいにおいては、参加チームが旧甲州街道での流し踊りに加え、グリーンホール及び駅前広場の特設ステージでの定点踊りを行い、回遊性あるイベントとして展開しております。

さらには、先般のラグビーワールドカップ2019日本大会におけるファンゾーンの開催に当たっても、グリーンホールと駅前広場の一体的な運用が行われたところであります。

このような屋内施設であるグリーンホールと屋外施設である駅前広場のそれぞれの特性を踏まえた一体的活用は、駅前広場の集客力を生かしたホール事業の展開が図られるとともに、特定の目的を持った来場のほか、来訪目的の有無に関わらず多くの方

に芸術文化に触れる機会を提供することや、駅前広場における賑わい創出に寄与するなど多面的な効果につながられているものと考えております。

また、有識者やグリーンホール利用団体等からも駅前広場との一体的活用による賑わいの創出に対しての期待や前向きな御意見をいただいているところです。そのため、グリーンホールの整備に関する市の考え方を整理するに当たっては、今後においてもこれまでと同様に、駅前広場の活用も含めた取組を継続することを念頭に、様々な事業展開を多角的に検討して参りたいと考えております。

### <まとめ>

ご答弁ありがとうございました。まだグリーンホール更新については公に説明できることが多くはないのだと思いますが、駅前広場との連続性については認識もありすでに先行事例もあることを確認させていただきました。

文化は、人が集まるところで生まれます。そして、豊かな景観や文化は、多様な市民が集まる場所で生まれます。新しい施設が規定の芸術文化に触れる機会を提供するだけでなく、芸術文化への関心の有無に関わらず、市民が居場所を見出し、自身が街の文化を育む施設にもなることを望みます。

では市民はどのような施設に居場所を見出し、直接ホールに用事がなくても足を運び入れたくなるのでしょうか？それを明確にするには、2番目の質問とも重なりますが、新しい施設について市民自身が意見の合意形成を図り、公に示す場が必要です。市民不在で庁内だけで検討を進めたり、これまでの利用者の声だけを聞いて市の案を固めてから単発の説明会や意見交換会、またパブリックコメントを行う進め方では、すべての市民に開かれた公共施設のあるべき姿は見えてこないと思います。

市の顔である駅前広場に作られる大きな公共施設ですので、シンボリックな存在ともなります。調布市はどういう街を目指すのか。調布市民にとって文化とはどういうものか。調布は市民にどのような文化的体験を保障し、人間らしい最低限度の生活を底上げするのか。そういうビジョンを形として表す施設です。まず、今のグリーンホールの利用状況をもっと客観的に検証してください。そして、構想段階の今を大切に、市民が生み出す調布独自の文化の可能性も視野に入れ、きちんと文化についても市としてのビジョンを持ち、完全に中立的なファシリテーターを介した市民ワークショップ形式で時間をかけて市民が合意形成できる機会を作り、丁寧に進めていただくことを強く要望して私の質問を終わります。